
大きな木の下のベンチ

日向 銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな木の下のベンチ

【NZコード】

N8790C

【作者名】

日向 銀

【あらすじ】

私は野球と、一人の先生に恋をした。先生と生徒、禁じられた思いに悩みながらも、それでも私は先生が好き。大きな木の下のベンチが私の居場所。

今日もグラウンドでは、大きな声が聞こえていた。

私はその声に包まれながら、グラウンドの近くにある、大きな木の下のベンチに腰掛けるのが放課後の習慣。

野球部の練習を見ながら、今日のみんなの体調をうかがう。別にマネージャーじゃないし、彼氏目的でも無いけど。

「木下。今日はどんな感じ？」

ふいにかけられた声の主は、振り向かずともわかる、あの人の声。

「そうね…。背番号2番、キャッチャーの子が良くないみたい。」

「そうか。じゃ、声をかけてくるか。」

面倒くさそうな気の抜けた足取りでふらふらとグラウンドにむかって歩いていく。

あの声はやっぱり、紛れもなく化学の教師で野球部顧問の桐生 竜彦。（きりゅうたつひこ）

竜とかかっこいい名前とは裏腹にいつもいい加減な人。でも私はそこが好き。

先生だから、こんな事思っちゃダメなんだろうけど。

「先生。」

「…何だよ。」

彼はだるやうに振り向いた。

「今日はどんな練習するの？」

「まあ適当にやるわ。」

「ふ〜ん。」

野球部のこと、ちゃんと考へてるのかな。

私は昔から野球が好きなうえに、人間観察に長けていたためか、日に付けられて、今日のような事をずっとしてきた。

「文句言いたいなら言えば良いだろ？ 何だよ。」

「先生、寝不足？」

「……は？」

「私の目にはそう見える。」

先生は持っていた煙草を携帯灰皿に押しつけて、頭をかいた。
そんな見慣れた仕草が、今日はやけにかつこいい。

「バレたか……。」

「ええ、まあ。」

先生は苦笑しながら、私の横に座った。
野球部に行くんじゃ無かったの、といつもなら言つだらうが、慌て
て口を噤む。

たまには見とれてみても、良いじゃない?
どうせ叶わぬ恋なのだから……。

「よつ」

先生は急に私の膝の上に頭をのせて横になった。

「な、何して……」

「ん? 膝枕?」

「じゃなくて! 何でそんなことしてるのよ!」
「寝不足なんだよ、ちょっと寝かせろよ。」

人の気も知らないで。

こんなとこ誰かに見られたら……。

「何笑つてんだよ。」

先生は私を見上げながら、ニヤッと笑う。
ガバッと手で顔を覆つ。

見られてると思うと、顔が自然に赤くなつて、それがさうに羞恥心
を煽つた。

「笑つてません。」

「笑つてるくせに……！」

「つるさい。」

「そんじや、木下。俺行くわ。また明日もよろしくな。」

「あ、はい。」

私は先生のだらしない後ろ姿を見送りながら、ため息をついた。

幸せってこういう事を言つのかな?

叶わぬ恋と知りながらも、やつぱり諦める事が出来なくて…。

ダメだつて思つてゐるのに、先生との時間が嬉しくて…。

愚かつていうのかもしれないな。

「ねえ、木下くるみさん。」

次の日の放課後、日直日誌を書き終わつて、空がオレンジ色に染まつた教室から出よつとしたひ、田の前に着飾つた女たちが立ちはだかつた。

「……誰ですか。」

「竜彦の女で～す。」

「あんた2ーAの田中麗子でしょ。先生の彼女つて…ダメじやん。」「あたしの事知つてんの? 嬉しい! あたしつてば美人で有名だからね。」

いや、ケバくて馬鹿つて有名かな。

私はかるく鼻で笑つた。

「で、何か用なの?」

「竜彦に近づくなバス!」

「…………は?」

「竜彦、あんたのせいで困つてた。ずっと悩んでるんだからー。」「私がなにをしたつていうの…?」

膝枕がいけなかつたの。

でも、それは先生がしてきたんじゃない。

日誌を握る手が自然と強くなる。

「嘘じやないわよ。竜彦が電話で言つてたんだもん。あんたの存在が邪魔なの！」

「…………うるさいな。」

「何よ！竜彦のためにも、もう近づかないで…」

「黙れっ！あんたに何がわかるつてゆつのよーーー。」

私は持つていた日誌を振り上げた。

きやーとこうわざとらしく悲鳴と同時に私の手首は掴まれた。

「大丈夫かレイコ。」

「ふえ～ん。竜彦お…怖かつたよ～…」

田中麗子が先生に抱きつき、鼻をする音が廊下に響く。

先生の顔は見えないが、荒い息づかいからして走ってきたんだろう。そんな事を考えている私の頭の中はなんて冷静なんだろ？、と鼻で笑っちゃいそう。

心はもう笑えないぐらいに痛いのに。

先生に掴まれた手首は、まだ掴まれたままで、力の抜けた手から日誌が落ちた。

「お前何やつてんだよ…女が日誌を振り上げるなんて…はあ…お前なあ…」

先生がこちらに振り返り、鋭い目つきで私を睨みつけた。

深いため息の音が、私の心をさらに切り刻む。

先生は私のせいで困つてる、迷惑してるのか。
だから寝不足なのかも。

掴まれた手首を振り払い、私は先生に頭をさげた。

「すみませんでした。もう一度と、先生を困らすことにはしません。」

「おう。真面目でよろしい！」

さつきとは一転、先生はいつものようにだらしなく笑いながら、私の頭をなでた。

「…………つ…。」

視界がぼやけてきたのを隠すために、私はもう一度頭を下げた。

「失礼します。」

「あーおいー！」

誰もいない廊下を駆け抜けた。

いつもの木の下のベンチの横も通り過ぎ、門を出てからやっと、足をゆるめた。

馬鹿みたい。

先生に恋した時点では迷惑に決まってるのに。

わかつてたはずなのに。

追つてきてくれるのでは、とこう淡い期待を持つだけの勇気もなくて、私は夕日を背にして足早に家に帰った。

次の日もその次の日も、化学の授業は寝て、放課後は走って家まで帰った。

おかげで先生と言葉を交わすこともなく1週間が過ぎた。田中麗子も、あれ以来見ていなかつた。

「木下！」

家に帰るひとつ大きな木の下のベンチの横を通り過ぎた時、今1番聞きたくない声がした。

「あ…、桐生先生。あの…、さよなら。」

「ちょい待ち！」

走り出せば良いものの、私は足を止めた。

「私…最低だあ…

「なんで？」

「…独り言です。」

振り向くことは出来ず、胸が痛くて泣きそうになる。迷惑になるなら、声、かけないでよ。

ほつといでよ…

「今日はみんな元気そうです。なので、失礼します。」

「待てってば！」

「ほつていて下さい。迷惑なんでしょう…? もつまつと…」

「迷惑だあ？ そんなこと誰が言つた。」

先生は目を丸くして、頭を搔いた。

それが無性に腹立たしくて、私は先生を睨みつける。

しらばつくれちゃつて。「あなたの彼女の田中麗子よ。電話でそつ言つたくせに。私がそばにいることで困つて、悩んでるんでしょう？ もう良いよ先生…、私知つてるから。」

「良くないな。それ、でつかい勘違いだから…」「…………勘違い…？」

先生は自分の横をポンポンとたたいた。

私は首を横に振るしかできなかつた。

「はあ…お前な…。悩むなんてめんどくさい事、お前の事だから出来るんだからな。卒業するまでは手出さないでおいつか悩んでたけど、やめた！ くるみ、俺のオンナになれ。」

淡々と先生は言つた。

「…………え？」

「え、じゃないだろ。」

だつて…

だつて

「田中麗子は？」

「レイコは彼女じゃないから。靈子、ただの背後靈にしか思つてない。」「うわ…最低…」

「なんで？」

「女心がわかつてない！」

それを聞いて先生は、何を思つたのか急に笑い出した。

「わかりたくないね、くるみの心以外は。」

「は、恥ずかしいこと言わないでください！」

顔はきっと夕日に負けないくらいの紅茶なのだと思つ。

「私、ずっと先生が好きだつたよ。」

「俺だつて。おいで、へぬみ。」

「…………うん！」

ためらいなく、私は先生の横に座つた。
もうここは私の居場所なんだ。

いつもと同じベンチなのに今までとは違うホッとした気持ちになつた。

夕日ももう沈みかけて、辺りはさらに紅色を増していた。

「卒業したら結婚しようつな。」

「子供が生まれたら名前は球児が良いかな？」

今日もまた野球部の声がグラウンドに響いている。

(後書き)

全然先生と生徒っぽくない…。
でもまた先生と生徒の恋の話を書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8790c/>

大きな木の下のベンチ

2011年1月20日03時46分発行